

二、日々の健康状態についての観察

と、大きく二つに分かれると思います。ここでは、主に、(二)の日々の健康状態についての観察結果の処理について、述べたいと思います。

まず、登園してきたときの、視診から始まって、下園するまでの健康観察結果を、健康観察簿に記録いたします。開園当初は、個々のことについて、文章で記録いたしましたでしたが、これでは、ますます事務が多忙になるばかりで、一見してその結果を、知ることができないので、いろいろ考えましたあげく、このような健康観察簿を作りました。

○健康観察簿の説明および処理系統図の説明

○衛生日誌の説明

○健康観察結果の集計について

1. 個人集計(健康観察月別集計表)について説明

2. 第一表(フリント(三十一年度統計)について説明)

3. 第二表(フリント(三十一年度統計)について説明)

○健康管理早見表の説明

○その他

1. 日々の連絡票の説明

2. 体重減少についての連絡票の説明

3. 健康についての年度末家庭連絡票の説明(進学児は小学校へ連絡)

以上、私ども職員全員が、ベストをつくして、行っている健康観察結果の処理の概要を、述べました。ささやかな発表ですが、愛することどもたちの幸福のために、またよりよきを期する意味におい

て、皆様のご批判をいただければ嬉しく存じます。

幼児の間食に関する研究

日本女子大学

武藤 静子

加藤 翠

桑原 綱

間食は子どもにとって必要なものだと思われている。しかし、その有り方についてはいまだ意見の一致がみられない。この間食の有り方を見出す手段の一つとして今回二つのグループについて間食のとり方、与え方について調査した。

第一は岩手、和歌山の両県の農村と漁村それぞれ一か所の保育所幼児二〇名ずつ、計四〇名、これに東京有識階級の幼児一〇名を加えたものが調査対象である。昭和三〇年の夏と冬に身体測定、臨床検査、生化学検査、食餌調査を行った。食餌調査は一人の子どもにつき二日間調査員が秤を持って歩いて歩き食べたものを全部記録する方法をとった。

子どもが間食によって一日何カロリーをとっているかをみると、各地平均が大体二〇〇〜四〇〇Calである。しかし、個人差が大きく、少いのは四〇Cal、多い場合は九〇〇Calを与えており、間食の与え方はかなりでたらめになっていると考えられる。これらは一曰総カロリーの約二〇％になるが、もちろんこれも変動が大きく、少い時は一日摂取量の三％、多いのでは六〇％近くを間食でとってい

たりする。和歌山農村および東京は比較的この変動が少く間食についてある程度考えられているようである。他の栄養素についてみると、保育所では脱脂粉乳を給食していた関係上、カルシウムは給食のある限りは一日摂取量の四〇%〜五〇%を間食でとるような結果になっており、また同じ理由で動物蛋白質、VBも間食に多い傾向がある。

これら幼児の間食回数は多い子どもは午後だけで五回におよんでいるが、大体において午前は〇〜一回、午後は一〜二回のところが多くなっている。

間食として与えられているものは、時期と所とを問わず菓子類、アメ類、果物類が多くなっており、夏冬のべ二〇〇日の調査でのおの一六五回、七四回、八四回使われている。ラムネ、シロップなど、飲物類が夏に多く、果物類が冬に多くなっている。保育所給食の脱脂粉乳を別とすると東京にミルクや手製のデザートが多いが目立っている。

間食の分量や回数と、子どもの発育、虫歯数などの関係を調べてみたが、今回の調査の範囲ではあまりはっきりしたものは見られなかった。発育や健康状態は間食というよりも、間食を含めた食生活全体と関連させてみるべきであろう。

第二の調査は東京の母親五一名と仙台、高崎、富山、静岡の町や村の母親八二名を対象としアンケートをとった。お八つをなぜ与えるかに対し「子どもが欲しがるから」が半分近くを占め、次は「食事だけでは栄養が不足だから」が多くなっている。東京と地方とを比較すると、「食事だけでは栄養が不足だから」とか「子どもの心を楽ませたいから」は前者に多く、「あげない」とするさいから」とか「あげない」と子どもがかわいそうだから」とか「子どもには甘いも

のが必要」が後者に多いのは面白い現象である。具体的に間食食品の名三五種ほどあげて子どもに与えるかどうか、それに対する理由を書いてもらったが、氷水やキャンデーを主に「子どもが好きだから」という理由で一四人が与えるといっている。甘い菓子類は「子どもが好きだから」という答えが多いが同時に「手間がかからない」という点も強調されている。しかし、駄菓子、あん菓子、あめ類は「虫歯ができる」「非衛生的である」として与えない組に入れている例が都会には多数みられた。

お八つを与えるのは東京では八〇%が母親、八%が使用人、地方では五六%が母親で三〇%が祖母になっている。これは指導上注意すべきことであろう。

子どもが与えられたお八つで満足するかどうかをみると、両地区共六〇%は満足していない。このうち、量的に「もっと欲しがる」というのが東京に五〇%、地方に三〇%で、「ちがうもの」や「近所の子どもも持っている物を欲しがる」「自分で買ってきたがる」などと合せて約三〇%みられた。満足しない場合「そのままほっておく」「代りのものを与える」は地方に多くそれぞれ五四%、四一%になっているが、都会では大分教育的になり「云い聞かす」五六%に達している。お八つのしつけでは、よそでいただいたお菓子を報告するか、について東京四八%、地方三三%に守られている。買い食いの割合は両地区とも約三〇%、金額は大部分五〜一〇円である。間食について最も困っている問題は「御飯を食べなくなる」で東京四八%、地方三〇%であり次が「何度も欲しがる」となっている。

以上二つの調査より次のようなことが云えると思う。
子どもの間食に対し小数の例外を除き殆ど栄養的な考慮が払われていない。すなわち(1)子どもの間食摂取の実態からも、母親のアン

ケ―と対する答からも、子供の問食に対して栄養的な考慮があまり払われていない。(2)一方、子どもの一日栄養摂取量中によって占められる割合が重要な栄養素においてかなりの高い価を示している。(3)与えられたお八つで子どもが量的にも質的にも満足してはいない場合が多いということなどである。

幼児教育誌を通じてみた

初期保育界の動向

尚絅女学院短期大学 本田 和子

我が国の幼稚園界も八十年の歩みを重ね、その歴史の顧られる段階にきているが、私はここに「幼児教育誌」を通じて初期保育界の動きを知ることを試みた。

対象としてとり上げたのは「婦人と子ども」誌である。本誌は明治三四年の創刊以来「幼児の教育」と名称を改めた今日まで、半世紀の余もわが国保育界と歩みを共にしているし、さらに、初期保育界の動きを継続的にうかがうことのできる唯一の資料であると思う。

まず、「婦人と子ども」なる名称をもった大正八年までを一つの単位と考え、この期間に誌上に現れた諸記事を通して当時の保育界の動向を次の三点からとらえてみた。すなわち「幼児教育の中心的関心は何に向けられていたか」「幼児教育を指導した理論はどのよう

なものであったか」「当時の社会は幼児教育をいかにみていたか」の三点である。

ここでは、第一の「幼児教育の中心的関心事」についてのみ発表する。

中心的関心事を知るために、私はまず誌上に現れた様々な記事を分類しその頻度を調べた。もつとも頻繁に誌面に現れている記事は、それだけ当時の幼児教育関係者の関心を集めていたものとみてよいと思われるからである。

その結果、最も多く誌上に現れる項目は「子どもの遊戯」を扱ったものであることに気づかされた。明治三四年から大正八年までの一八巻中は遊戯を扱った記事は五〇例にわたっている。それゆえに、当時の幼児教育界の関心は子どもの遊戯に向けられていたとみなし、誌上に現れた遊戯論を考察した。

幼児の遊戯活動を保育の真髄とする考え方に格別の不思議はないが、当時の保育界においては、遊戯という語が異なる二種類の内容をもたされていたものようである。すなわち、いわゆる「唱歌」「手技」などと並び称される保育項目の一つとして狭義に用いられている場合と、子どもの営む自由遊びをも含めてより広い意味に用いられている場合とである。ここでこのように二種の遊戯観の存在した理由を考えてみたいと思う。

遊戯のある特定の型をもった活動として狭く考えねばならなかった背後には、フレイベルの恩物による保育とか、母の歌と愛撫の歌によるゆうぎといった一定の枠をもった活動を保育の至上の形態とする誤って解釈されたフレイベル理論が影響していはしなかったであろうか。当時の米国におけるフレイベル批判は、わが国の幼稚園界をも刺激し、東基吉氏らの理論的指導者によってそれが紹介され